

新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 篠原 俊一

平成二十八年を迎え、謹んで御祝詞申し上げます。

旧年中は、当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の史跡見学会・研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も三十四年目を迎え、県内外から高く評価されているところでございます。この「ながさきの空」も定例の発刊を重ね四〇二号を刻むこととなりました。

本年も『長崎学』を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の振興に貢献してまいりたいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

平成二十八年

申年によせて

越中 哲也

先ずは新年のおよろこびを申し上げます。

さて、本紙・恒例により、今年の干支を繙きますと「丙申年」とあり「ヒノエ・サル」の年」と読むのだそうです。

中国で此のような「十干十二支の法」が始まったのは殷の時代だそうですが「干支」で年をあらわすようになったのは前漢時代の初期(紀元前一六四年)頃からであったそうです。

我が国に之の中国の干支の法が伝えられたのは古墳時代の頃からであり、正倉院の御物の中には既に「十二支刻彫石板」が保存されているそうです。



猿の図(中山文孝 画)
長崎純心大学博物館蔵



唐寺興福寺 猿木彫
(片岡勝義 撮影)

逸人畫史(岡田櫻軒著)や『古畫備考』(朝岡興禎著)にすでに其の名が記されている。但し『長崎畫人伝』(渡辺鶴州編)には猿仙の画行を記していない。それについて林源吉先生は「鶴州が『画人伝』を編輯した時すでに大

阪に行っていたからであろう」と言われる。

森家は元来、大阪の画人で長兄も狩野派の画家森陽春という画人で、其の代表作として長崎かじ屋町大光寺本堂餘間の襖に桐鳳凰図の大作が残っている。次兄貴信も画人で、文政六年(一八二二)八十六才大阪にて歿すとある。

猿仙は延享四年(一七四七)生れ、文政四年(一八二二)大阪で歿し号を靈明庵と称している。特に猿の図は有名であった。その理由は「猿仙・山中肅寺を宿とし野猿を実写した」からであると言う、この猿仙が肅山とした処は多良岳金泉寺であったと言われる。

『長崎談叢第十九輯』(昭和十二年刊)林源吉先生の論考「畫人猿仙と噂の多良岳」に次の文を記しておられる。

昭和十一年七月、久し振りに来遊された吉井勇氏が其の月の十日に湯江村の有志に招かれて出立の時、私は画人猿仙と噂の多良岳の話をも簡単に述べたところ吉井氏は之の話に興味を持たれて登山された。其の後吉井氏の短歌に次の短歌がありました。

多良岳の摩尼の山路のゆきかえり 猿仙の猿に会ふよしもかな

次に、長崎には猿工芸の名工がおられた。それは永見徳太郎先生の『長崎の美術史』(昭和四九年刊・長崎書店刊)に次のように記しておられる。

野田光廣 肥前諫早領矢上村の人にて家世に鐔師たり。彼は父に技を早くより受け、二十才の時、江戸に出て修業す。領主彼の妙技

今年の干支「丙」について「丙は炳なり」と記し、其の説明に「万物始め甲乙丙丁…の十干の甲より始まる。甲は甲で種の甲を破つて出ずる事。乙は軋と韻が通じ万物が軋々然と伸び出る事。丙は炳と同意にて万物生じて炳然とあらわるる事。丁は…」

十二支の「申」の文字についての説明は「申は身に通じ、万物の体が完成する事」とある。ともあれ本年は「事物炳然とあらわれ全て完成する」よき年であると私は考えている。

次に十二支というのは「天体の十二辰に象つて一月より十二月に配した」のだそうですが、其の十二支の「子の文字を鼠」に「丑の文字を牛」：というように多くの動物の中よりどうして十二の動物を選んだのか不明だという。

我が国の昔囃で猿が登上する話といえは私達は先ず「猿かに合戦」を思い出す。その昔、猿は自分が拾った柿の種を、蟹が持っていた「おにぎり飯」と交換、其の後、蟹は柿の種をまきました。やがて柿の木は大きくなつて大きな実がなりました。猿が其の時「蟹さん、あなたは木に登れないから、私が取つてあげますよ」と言つて木に登り、おいしい柿は自分が食べ、渋い柿を上から投げて蟹さんを殺してしまいました。蟹さんの子は悲しみ、白・杵・蜂・栗さん達の助けをかりて仇をうったそうです。室町時代に作られた童話だと言う。

桃太郎さんのお話にも、お供に猿がついていますね。さて猿と言えば、中国・明時代の呉承恩作の「西遊記」に登場してくる孫悟空でありましよう。孫悟空は三蔵法師の従者として猪八戒・沙悟浄と共に天竺国に一切経を求めて旅に出て、無事経典を得て白馬寺に帰国するという物語で、其の旅の途中、各種の妖怪に出逢い苦難の道を歩くが悟空の神通力で征服するという何か愉快な物語で、中国の京劇にも取りあげられ親しまれている。長崎で猿の話といえは私は画人森猿仙の事を思い出す。猿仙は『近世

に感じ、扶持米を給した程で、彼の作品千匹猿、千俵は最も有名で文化年間六十五才で歿。(一八一八年頃)

其の頃の武士は好んで此の鐔を大刀に用ひ、光廣の千匹猿といつて誇つていた。思うに猿は魔を拂ふ魔除けの鐔となつたものであろう。

昭和七年一月発刊の『奈雅瑤奇』(れなせんさ会刊)に宮崎清成先輩は「南京寺の猿」を発表されている。その文によると

寺町の唐寺興福寺内の好應閣の隅木には四匹の猿の彫刻品があつたが今は一匹のみ残つている。今日でも痘瘡除けの猿として人から敬われている。この堂の創立は元和年間であつたが寛文三年の大火にて焼失、享保七年(一七二二)再建。…

最初は四匹いたそうですが作りがあまり巧妙であつたので一匹ずつ逃げ去り、最後の一匹も逃げようとした時、突然、観音様があらわれ「町では今痘瘡が流行しているので子供達を守るために寺におるように」と言われたそうです。猿はびつくりして「御命令の通り元の所に止り、御役目大事に仕へますから、お許し下さい。力を尽して病気の予防について御奉公申し上げます」と詔を入れ寺にとどまつたという。

そして、この猿物語はインドの経典(Tinduka Jalaka)によつたものだと記してあり、現在この猿公は原爆により妙應閣が破壊したので現在は同寺庫裡内に松尾御住職の御取り計いで端座しておられる。又唐寺崇福寺にも唐工作の猿面の守護佛からおられるので拝顔に行かれるとよい。

長崎の古賀人形にも桃を抱いた可愛い猿の古賀人形があり、口伝によると次のように記してある。

猿は山王大権現の使者で大いに蟹を嫌ふこと甚し、且つ猿は農業を祝い、商家を賑わし、武家の厩を守護す。

中国の猿の説話には我が国にはない色々の猿の話が書いてあつた。「猿は寿八百才になると猴となり、寿千歳となれば化して老人となり、美貌の婦人を見ると山中に同伴し妻とする」そうです。(博物志)

